

アイヌ民族を愛した松浦武四郎

7月29日（金）14：40～16：10 札幌会場
9月1日（水）19：00～20：30 東京会場

講師 山本 命 松浦武四郎記念館学芸員

はじめに

松浦武四郎記念館で学芸員をしています山本命（めい）と申します。本日はよろしくお願いいたします。

まず、私のセミナーのテーマ「アイヌ民族を愛した松浦武四郎」ですが、松浦武四郎という名前をご存知の方でも、どんな人物であったかを詳しく知っておられる方はそれほど多くはないと思います。そこで、松浦武四郎とはどんな人であったか、アイヌ民族を愛したと言いましたが、武四郎はどのようにアイヌ民族とかわかってきたかということについてお話をさせていただきたいと思います。

なお、このお話の中ではアイヌ語を母国語とする人々をアイヌ、日本語を母国語とする人々を和人、江戸時代の北海道のことを「蝦夷地」としてお話をさせていただきたいと思います。

武四郎の生誕地「三雲町」

まず、武四郎が生まれた三重県一志郡三雲町（※平成17年1月1日に市町村合併をしまして三雲町は松阪市になりました）というところについてお話しします。三重県は南北に長く、ちょうど中部に日本で一番短い地名で知られる津という県庁所在地があります。津市のすぐ南に三雲町はありまして、町の南は松阪市で知られる松阪市に接しており、津と松阪に挟まれた大変小さな町です。その面積は約19平方キロメートル、人口は約1万2,000人。4キロメートル×5キロメートルの範囲に収まり、広大な北海道では信じられないぐらい小さな面積の町です。町の特徴は、なんとと言っても松浦武四郎であり、武四郎が生まれた小野江地区というところに松浦武四郎記念館が建てられています。

武四郎の顔

次に、武四郎が生きた時代ですが、江戸時代の終わりごろにあたる1818年に生まれ、明治時代の中ごろにあたる1888年に亡くなっていて、幕末から明治維新という激動の時代を生きました。どんな顔をしていたか気になるのですが、65歳ごろに撮ったとされる写真が残っております。

おじいさんの頃ですが、首からいろいろな飾り物をぶら下げています。武四郎はこういった玉類の飾り物、アクセ



【写真1】武四郎肖像

サリーを集めていたようです。その中には、アイヌの女性から贈られたものでしょうか、女性の胸元を美しく飾った首飾りや、勾玉や管玉という古代の玉製品も含まれていて、武四郎は晩年に骨董品の収集をしています、中でも玉類を集めることに熱中していました。

写真では優しそうな顔をしている武四郎ですが、自分で決めたことは何があってもやり遂げる性格だったようです。例えば、骨董品集めに熱中していた頃などは、欲しいと思ったものは持ち主が根気負けするまで持ち主の前で頑張って座っていたと言われていました。そういう気が強い一面があれば、不正を許さない正義感の強い一面もありました。

それでは、これから武四郎が江戸時代の終わりに蝦夷地を調査し、調査を通じてアイヌの人々と深く交流し、アイ

ヌの人々の人権を守るために力を尽くしたことについて、武四郎が残した資料を通して紹介をさせていただきたいと思います。

少年時代

まず、武四郎が生きた時代である江戸時代はどのような時代であったのでしょうか。江戸時代は武士を中心とする社会で、現在のように誰もが平等ではなく、人権という考え方も一般的ではありませんでした。そのような時代にどのようにして武四郎がアイヌ民族を守るために力を尽くしたか、みなさんは疑問に思われることと思います。

その答えは、武四郎の生涯に隠されています。そこで、武四郎の生涯を紹介させていただきます。

武四郎の生家は、現在も三雲町小野江（現在は合併し松阪市小野江町）にあります。



【写真2】武四郎生家

生家前の道路は、江戸時代には現在の三重県四日市市で東海道と分かれて伊勢神宮へと続く道で、「参宮街道」と呼ばれ、伊勢神宮へお参りに行く人々にぎわいました。ちょうど武四郎が13歳のとき（1830年）に、全国各地からグループで伊勢神宮にお参りする「御陰参り」という現象が大流行し、1年間に400万から500万人ぐらゐの人々が伊勢神宮へ訪れたと言われています。そして、武四郎の家の前を多くの旅人たちが行き交い、旅人から旅の話を聞くこともあっただろうと思われます。武四郎が後に全国各地を歩きまわるようになったきっかけの一つに、生家の立地が大きく関係していたことは間違いないでしょう。

武四郎は7歳で生家近くにあった真学寺というお寺で、和尚さんから読み書きを習います。その頃から愛読していた本は、「名所図会」（めいしょずえ）といって全国各地の名所を図入りで紹介する本でした。今にたとえるならば観光ガイドブックのようなものですが、「名所図会」を読んでいた武四郎は、日本には実にたくさんの名所があることを知ります。そして、名所の図を眺めているうちに、自分も各地を旅して、いろいろな名所を見てみたい、実際にこの目で確かめてみたいというふうになるようになっていったと思われます。

13歳のときに「御陰参り」が大流行しますが、この頃か

ら武四郎は津藩の学者である平松楽斎の私塾で勉強します。平松楽斎は当時とても高名な学者でした。武四郎の少年時代は全国的に冷害で作物が育たず、飢饉により多くの人々が飢えに苦しんでいました。そこで平松楽斎は、藩主に進言して津藩が備蓄をしていたお米を苦しむ人々に配ったり、いろいろな雑草をどのように調理すれば食べられるかといったことを記した本を著して、多くの人々を飢えから救いました。

家を出る

平松楽斎の塾で勉強をしていた武四郎は、3年ほど学問に励みました。

16歳になった武四郎は、塾を突然やめて、両親にも内緒で江戸（東京）へ出ます。旅に出て各地を回り、もっと多くのことを学びたいと思ったのかも知れません。

このときの様子は、武四郎が親戚とやりとりした手紙に詳しく記されています。手紙には、内緒で家を出ることや、後始末を親戚に頼んでいることが記され、計画的な家出であったことが伺えます。ちなみに、この手紙には中国やインドへも旅をするかもしれないということも記されていました。

やがて、武四郎が江戸にいるとの情報が実家へ伝わります。武四郎は江戸へ出て学者の門を叩いてまわったのち、生活していくために職を探しますが、その時に知り合いの人を頼ったことがきっかけでした。武四郎の実家ではすぐに金蔵という使いを送り、武四郎を連れ戻そうとします。しかし、武四郎は2、3日江戸を見物し、帰りは長野の方を回ってあちこち寄り道をして帰ってきます。もう旅の虜になっていたのです。

諸国を遍歴する

帰ってきた武四郎はしばらくおとなしくしていますが、やっぱり旅に出たいということで、本格的に全国各地を回る旅に出ます。実家では武四郎はすぐに帰ってくるだろうと思ったかも知れませんが、この時から武四郎は28歳で蝦夷地へ渡るまでの間、日本全国各地をぐるぐる歩き回る旅に出まして、お父さん、お母さんが亡くなったことすらも旅先で知るといふ長い旅を続けました。

武四郎の旅は、最初から北海道を目指したわけではなく、とにかく自分のまだ見たことのないところは全部見るんだという勢いで、全国各地を歩き回ります。



【写真3】杜寺雑記

これは、20歳頃の武四郎が記した野帳（フィールドノート）で、広島にある厳島神社の境内の図です。右側に厳島

と書かれていますが、ここにはどういう神社であって、何という神を祭っているかなど、手のひらぐらいの大きさしかない帳面にぎっしりと情報が書き込まれています。武四郎は蝦夷地の調査でも膨大な記録を残していますが、その記録をとり始めることを若いころから既に行っていたことがわかります。17歳のときからあちこちを回りまして、19歳で四国八十八カ所霊場を全て回ります。20歳からは九州を一周します。

旅をするだけではありません。旅の後に見聞録としてまとめた「西海雑誌」（1843年）、「四国遍路道中雑誌」（1844年）という原稿があり、後の蝦夷地調査で発揮される記録を残す姿勢は、若い頃から既に培われていました。

中国・インドを目指す

武四郎の16歳の手紙には、中国やインドを目指しているということが書いてありました。そして、九州一周を果たした後、実際に九州と朝鮮半島の間にある壱岐、対馬という島まで渡ります。目の前には朝鮮半島が見えていましたが、江戸時代は鎖国制度といって、日本は外国と一切お付き合いはしない幕府の政策でしたので、朝鮮半島へは渡ることができませんでした。

では、なぜ中国、インドに行こうとしていたのでしょうか。武四郎は小さいときにお寺でいろいろなことを教えてもらいますが、密教の呪文も教えてもらっていたようで、お坊さんにあこがれていました。そして、全国各地を回りながら、霊山と呼ばれる高い山にいくつも登っています。霊山とは、信仰の対象として、ほら貝を吹きながら山伏たちが修行を行っている山です。武四郎が中国、インドを目指した理由は、仏教に対する関心が非常に高かったために、仏教の本場の様子を自らの目で確かめてみたかったのではないかと考えられます。

蝦夷地を目指す

結局、鎖国制度によって朝鮮半島へ渡ることができなかった武四郎は、長崎あたりに滞在します。長崎は、当時出島というところで中国、オランダと貿易をされていて、海外の情報を武四郎は聞くことができました。そして、日本の周りの状況を知るのです。その当時アジアの国々のほとんどはヨーロッパの植民地になっており、日本列島の周辺にも外国の船がやってきて開国を求めています。このままでは日本が外国の植民地にされてしまうのではないかと、その中で最も幕府の脅威であったのが、南に勢力を拡大しようとしていた北の大国ロシアでした。武四郎は、今まで目を向けていなかった蝦夷地へと目を向けることになります。

当時の江戸幕府は、ロシアとの緊張関係から調査隊を蝦夷地に派遣して、蝦夷地の情報収集をおこなっていましたが、情報が一般に知られることはありませんでした。そこで、武四郎は蝦夷地をこの目で確かめるために、調査を行うことを決意します。

車も鉄道も飛行機もない時代に、長い道のりを歩いて蝦夷地へ渡り、調べようとするのはとても大変なことでした。

武四郎の調査

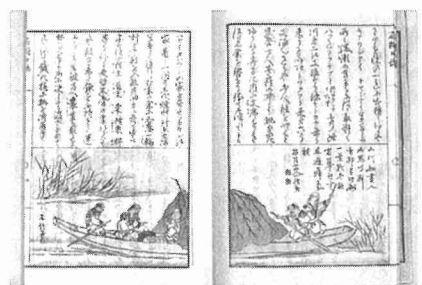
武四郎は28歳から41歳まで6回に及ぶ調査を行います。武四郎以前に蝦夷地調査をおこなった人物はたくさんいますが、その中でも有名な人に、間宮林蔵、最上徳内、近藤重蔵がいます。江戸時代の蝦夷地調査をおこなった人物の中では武四郎が後輩にあたりますが、それまでの人々は幕府の調査隊として蝦夷地へ派遣された人々であり、一個人として蝦夷地を調査しようとした点で武四郎と違っていました。

幕府調査隊は複数の隊員で行動しており、アイヌの人々に道案内をお願いして調査を行います。一方、武四郎の場合は一人で出かけて行き、やはり地元のアイヌの人々に道案内をお願いして調査にあたりますが、寝食を共にする生活の中で、アイヌの人々が捕まえた動物の肉を分け合って食べたり、武四郎が持っていったお米やみそなどを分け合って食べたり、アイヌの住居「チセ」に泊めてもらうこともあれば、みんなで野宿をすることもたびたびありました。

武四郎は、アイヌの人々が協力してくれたからこそ調査をおこなうことができました。そして、調査を通じてアイヌ文化に深く触れるとともに、アイヌ文化は自分たち和人とは違った文化であるが、アイヌ民族が独自ではぐくんできたすばらしい文化であることに気づいていくのです。

調査の様子

武四郎が紀行文として出版している『石狩日誌』（1860年頃刊）という本には、中の挿し絵に石狩川を舟に乗って調査をしている様子が描かれています。ちなみに、大きなフキの葉をかぶっているのが武四郎です。



【写真4】『石狩日誌』

また、『北蝦夷余誌』（1860年頃刊）という本がありまして、江戸時代にカラフトのことを北蝦夷と呼んでいましたが、カラフト調査の紀行文です。挿し絵にはいろいろな人々が描かれており、カラフト南部に住むアイヌの人々や、カラフトの中部のあたり



【写真5】『北蝦夷余誌』

に暮らしているウイльта族（後ろ髪を編んで毛皮を着ている人）、カラフト北部からアムール川の河口域にかけて暮らしているニブフ族（帽子をかぶり魚の皮の衣を着た人）といった北方民族も描かれています。

幕府役人となる

武四郎は、第1回目の蝦夷地調査から第3回目の調査を終えますと、「蝦夷大概図」という地図を作ったり、『初航蝦夷日誌』、『再航蝦夷日誌』、『三航蝦夷日誌』という調査の記録をまとめていきます。武四郎の記録は噂になりまして、いろいろなところから写させてほしいという依頼があり、やがて、武四郎の名前は幕府にも届き、随分蝦夷地について詳しい人物だということで、幕府のお雇い役人として蝦夷地調査を行うことを命じられます。こうして第4回目から第6回目の調査は、幕府の役人として行いました。

アイヌ文化を伝える

6回の蝦夷地調査で、武四郎はアイヌの人々の暮らしについてたくさんの記録を残しました。その一つに1859年に刊行された『蝦夷漫画』という本があります。武四郎は、アイヌの人々の生活や文化を紹介するために、みずから絵を描きました。武四郎の願いは、少しでも多くの人々にアイヌ文化を正しく理解してもらうことであり、江戸や京都や大坂など蝦夷地から遠く離れたところにいる人々に、アイヌの伝統的な文化は優れたものであって尊重すべきものであることを伝えていきます。



【写真6】『蝦夷漫画』より



【写真7】『蝦夷漫画』より

ら今に大切に受け継がれてきている踊りであることがわかります。武四郎もこの踊りはお気に入りであったようです。

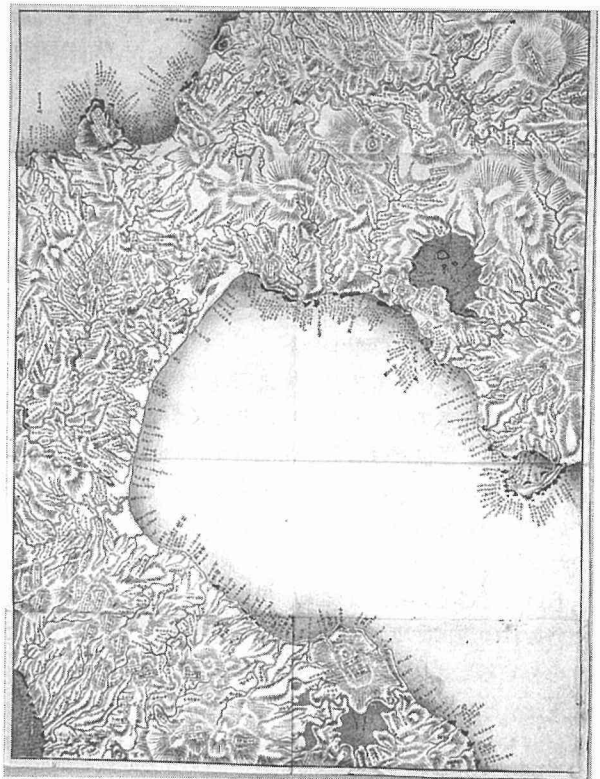
たとえばこれは、右側が衣類などを編むための道具です。アイヌの人々は、植物の繊維などから衣装をつくっていきますが、木の皮から繊維を採っているところが左側の図です。

こちらは「鶴の舞」（サロルンリムセ）です。現在は、アイヌ民族の伝統文化を受け継がれる団体のみなさんが踊られている踊りも、当時から今に大切に受け継がれてきている踊りであることがわかります。武四郎もこの踊りはお気に入りであったようです。

アイヌ語地名を残す

武四郎は蝦夷地の詳細な地図を作っており、地名はその土地の文化であり歴史であるとして、アイヌ語地名を数多く収録しました。

1859年頃に武四郎が出した『東西蝦夷山川地理取調図』は、1枚1枚が部分図になっていて、26枚ある部分図を全てつなげていきますと、縦が2 m40cm、横が3 m60cmの、北海道、国後、択捉を含む、江戸時代の北海道の図の中では最も大きな地図になります。



【写真8】『東西蝦夷山川地理取調図』

この地図をよく見ますと、海岸線の一つ一つにアイヌ語の地名がびっしりと記されています。また、内陸部のアイヌ語の地名も多く収録されています。武四郎は6回の調査で内陸部を調査していますが、川の流れを細かく記し、ケバ（細い線）を使って地形をあらわすなどその成果がこの地図に表れています。

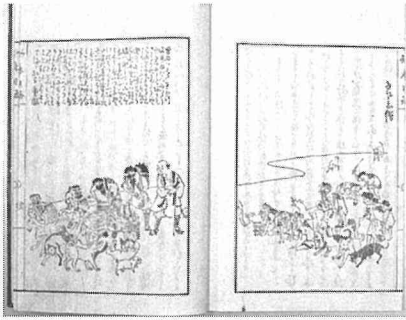
『東西蝦夷山川地理取調図』には地図以外に、「首」と「尾」という二冊があり、地図の凡例や解説を書いたものがあります。「尾」の最後には、調査に協力し道を案内してもらった100人を超えるアイヌの人々の名前が載せてあります。武四郎は、この地図をつくることができたのはアイヌの人々が協力してくれたおかげであるということ、名前を記し、感謝の気持ちを込めたものと思われます。

こうした地図の出版は、蝦夷地の位置やどのような地形であるかを、遠くはなれた場所にいる和人達へ伝える上で、大きな効果があったと言われています。

アイヌの訴え

武四郎の記録は、多岐にわたります。そして、北海道の各地を調査した記録を紀行文としてまとめたものが刊行されますが、その中でアイヌの人々から聞いた訴えについても武四郎は記しています。

江戸時代の終わりごろ、アイヌの人々は和人によって大変ひどい扱いを受けていました。武四郎はアイヌの人々と寝食をともにして調査をする中で、ひどい扱いをする和人に対して怒りをもって接していきます。



【写真9】『知床日誌』

武四郎の出版した『知床日誌』（1863年刊）の挿し絵には、アイヌの訴えを聞く武四郎の姿があります。武四郎はこの絵の中の左側に立ち、左側に真っ黒なひげと髪で、背中に荷物背負っているのが道案内をしているアイヌの人々で、そのほかにいる人たちを見ると老人と子供だけという状況です。武四郎はこの村を訪れて、出迎えてくれたアイヌの人々を見て、若い人たちがいないことを不思議に思いたずねてみたところ、長老が涙ながらに訴えました。

若い人は誰でもみんな国後、択捉へと連れていかれ、男性であれば漁に従事させられる。女性であれば役人などに肌をもてあそばれて、家にいることができない。残された老人と子ども達は、潮が引けば浜辺に出て貝や海藻を採り、潮が満ちれば山に入って草の根を掘って食べ、わずかに命をつないでいるということでした。

武四郎が驚いて人口を数えてみると、この村には173軒713人（1858年）の人々がいましたが、1822年に幕府が調査をしたときには、316軒あって1,326人くらいのアイヌの人々がいたことがわかりました。なんと36年間で、約半分にまで人口が激減していたのです。

武四郎はこの話を鈴木重胤という国学者に話し、鈴木重胤はその話を聞いて、これから親を養い、子を育てていくであろう年頃に、役人や商人の行いは本当に人間の情をわきまえないもので、誰であっても許されるべきことではなく、涙を流さずにはいられなかったと感想を書いています。

武四郎はこうしたアイヌの訴えをあちこちで聞き、著作によって多くの和人へこの問題を訴えかけました。アイヌ文化には文字がありませんが、文化は口伝で親から子へ、子から孫へと伝えられてきました。ところが、こうして若い人たちがどんどん連れていかれて、アイヌ文化が失われていくことに、武四郎は非常に危機感を感じ、幕府に対して、明日の開発よりもまず今日のアイヌの命を守るべきであることを訴えていきます。

「近世蝦夷人物誌」

武四郎の著作の中でも注目されるのが、1858年に書かれた「近世蝦夷人物誌」です（※平凡社ライブラリーから『アイヌ人物誌』として訳本あり）。当時の和人の多くは、アイヌ民族に対して誤った認識をしていましたが、武四郎はアイヌの人々のありのままの姿を記し、アイヌ民族を正しく理解してほしいという願いを込めました。

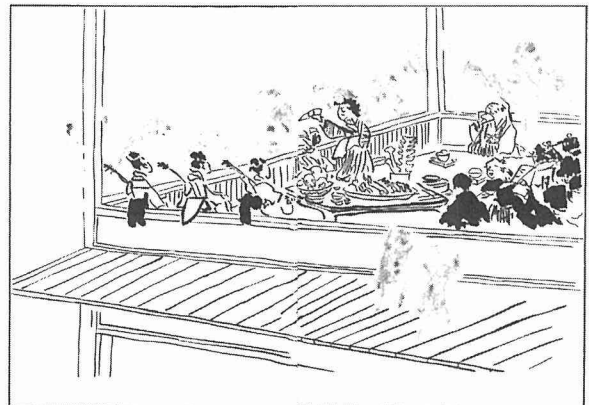
3巻99話の中に、百数十人のアイヌの人たちから聞いた話をありのままに記しました。登場人物はすべて実名で、武四郎はまず、アイヌの人々の人間性を知ってもらおうとしました。親孝行なアイヌ、勇敢なアイヌ、賢いアイヌなどさまざまなアイヌの人々の姿を紹介するとともに、和人によってひどい扱いを受けていたアイヌの人々の姿も、ひどいことをする商人や役人たちの実名とともに記されています。武四郎の思いは、多くの人々にこの本を読んでもらい、こうした行為が同じ人間として正しい行いかどうかを人々に考えてもらうことにありました。

おのづからをしへにかなふ 蝦夷人が ころにはぢよ
みやこがた人

この和歌は、「近世蝦夷人物誌」の中に収められたものですが、アイヌの人々を誤って理解していた和人たちに対して、アイヌの正しい姿を理解すれば、逆に私たちが教えられることがたくさんあるのだ、都に住む人たちは心の中で反省すべきであると訴えかけています。武四郎自身、アイヌ民族から教えられることはたくさんあったことでしょう。

夢の中の出来事

「近世蝦夷人物誌」の最後に出てくる挿し絵もまた、武四郎の思いが込められたものです。



【写真10】「近世蝦夷人物誌」より

この絵は宴会をしている場面で、武四郎は後書きのところでこう記しています。私がこの本を書き終えて、疲れて窓辺にもたれかかって眠ってしまうと、夢の中で魂が函館に飛んでいって、有名な料亭の2階を空中からのぞきました。そこには、扇で口元をおおう役人がいて、その脇には

ずらりと商人が並び、役人の御機嫌を伺い接待をしていました。座敷には大きなテーブルにおいしいような料理がいっぱい並び、お酒もなみなみとつがれています。そして、芸者が三味線に合わせて舞を踊っており、まさに贅の限りを尽くしていました。突然そこに生臭い風がさーっと吹いて、よくその状況を見てみると、お皿においしいように盛られていた料理はアイヌの人々の肋骨であり、内臓であり、なみなみとつがれていたお酒はアイヌの人々の生き血であり、部屋の襖に描かれていた聖人の絵は、アイヌの人々の霊となって襖を抜け出し、恨めしや、恨めしやと宴会を取り囲んでいる姿に、武四郎はびっくりして目を覚まします。こうした夢の話を書いた後で、武四郎はアイヌの人々の声を、私だけでなくもっといろいろな人々に知ってほしい、その願いによってこの本を書いたのだと締めくくりました。

夢の中の出来事として書かれていますが、アイヌの人々を苦しめていた役人や商人の名前が実名で記されるなど告発ともとれる内容であったため、役所の許可を得ることができず出版は禁止されました。また、この本が公表されるのは、武四郎が亡くなってずいぶん後のことでした。

武四郎の怒り

ころせよ えみしもおなじ 人にして この国民の
数ならぬかは

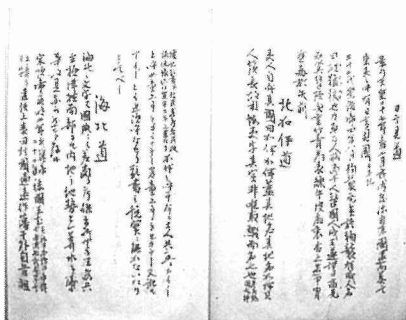
この和歌は、武四郎が出版した『西蝦夷日誌』の四編に収められたものです。

心によくとどめておきなさい、和人たちよ。アイヌも私たちと同じ人間じゃないのか。幕府はアイヌを同じ日本人だというならば、どうして同じ国の民として対等に接しようとししないのか。

武四郎は、和人によってひどい扱いを受けるアイヌの人々の姿に心を痛め、怒りを持ってこの和歌を詠んでいます。

北海道という名に込めた思い

江戸時代が終わり明治維新を迎えますと、武四郎は明治政府の開拓使という役所で、長官、次官につぐ開拓判官という職に登用されます。そして、武四郎は北海道の名前、支庁の名前、郡の名前、境界について明治政府へ上申書を提出しています。



【写真11】『北海道道名撰定上申書』
には、なぜ「北加伊道」という言葉が生まれたの

松浦武四郎記念館には、武四郎が明治政府に提出した上申書の写しがあります。そこには「北海道」が、当初は「北加伊道」というふう

でしょうか。上申書には、「加伊」とは「熱田神宮縁起」という古い本の中に、「東の方に住む人々は、自分たちの国のことを加伊と言う」とあることを指摘し、武四郎が1863年に著した『天塩日誌』には、天塩地方を調査していたときに、アイヌの長老から「我々はこの土地に生まれた者をカイという」という話を聞きます。「北加伊道」の「カイ」とは、アイヌ民族の大地であることを表しているのです。武四郎は、国名（今の支庁名）、郡名についても、アイヌ語の地名をもとに撰定を行い、アイヌの生活圏をもとに境界を考えました。武四郎が目指した北海道は、先住民族であるアイヌが尊重され、アイヌと和人が共存できる大地であったのです。

開拓使での武四郎は、今まで大変苦しい思いをしてきたアイヌの人々が暮らしやすい北海道にしようと取り組みます。しかし、武四郎の意見はなかなか聞き入れられず、政府の開拓政策はアイヌの人々にとって民族の尊厳を傷つけられるものでした。さらに、アイヌの人々を酷使し、うまい汁を吸ってきた商人たちは、武四郎を罷免させようと動きます。

そして、武四郎はわずか半年で開拓使を辞職します。今までの功績が認められ、国から従五位という位ももらっていましたが、その位も国に返しています。武四郎にとっては自らの地位や名誉などよりも、アイヌの人々を守ることができなかったことに対して申しわけない気持ちが強く、顔を向けることができなかったのでしょう。それ以降は北海道へ渡ることはありませんでした。

武四郎の人間性

最後に、武四郎の著作をいくつか紹介して参りましたが、本日お話しした中で、アイヌの人々が江戸時代にひどい扱いを受けていたことが、みなさまの印象に残る事と思います。武四郎は、アイヌ民族は独自のすばらしい文化をはぐくんできた人々なのに、どうしてこんなひどい扱いを受けなければいけないのかということを訴えています。武四郎の思いは、そのすばらしい文化を、生き生きとした暮らしを送っている姿を伝え、アイヌの人々のことを正しく理解することを求め、権力を持つ人々の行為が正しいことかどうかを問いかけています。

武四郎が、他の和人と違い、なぜアイヌ民族の文化を受け入れることができたのでしょうか。武四郎は、若いころから全国各地を旅して、いろいろな人々に出会い、いろいろな考え方を知り、いろいろな土地の文化を見て成長しました。和人のほとんどは自分の住むところ以外に外に出ることがなかった時代でしたので、自分たちとは違った価値観を排除しようという考え方をもちがちですが、武四郎はいろいろな価値観があることを認め、それを受け入れることができる広い心を持った人間であったのです。

今、国際社会と言われ、異文化理解をしましうと盛んに言われていますが、江戸時代の終わりに一歩進んで、外に広く目を向けていた武四郎の姿勢には驚かされます。広い視野を持ち、いろいろな価値観を受け入れることは簡単

ではありません。現在でも、宗教観や価値観の違いからでも、世界中で対立や紛争が起こったりしています。

江戸時代は、武士が頂点である社会で、まっすぐ武士に立ち向かっていけば殺されるかも知れない時代でしたが、武四郎は、アイヌの人々にはアイヌ独自の文化があることを認め、受け入れる広い心を持ち、決して不正を許さず、よき隣人、友人としてアイヌの人々を守るために、松前藩から暗殺されそうになっても、自分の命をかけてアイヌ民族を守るために力を尽くしました。

おわりに

松浦武四郎が亡くなってすでに一世紀以上がたちましたが、武四郎の人間性や生き方は、今の私たちでも学ぶべきところは多いのではないのでしょうか。

本日は武四郎の人生をとおして、武四郎がアイヌ民族とどのようにかかわったか、一世紀以上前に、アイヌ民族を愛し、アイヌを守るために力を尽くしたことを、お話をさせていただきました。みなさまには「武四郎のころ」を感じていただければ、大変うれしく思います。ご清聴どうもありがとうございました。